

京大広報

No. 461

京都大学広報委員会



東南アジア研究センター・アフリカ地域研究センター 共同研究棟

—関連記事本文 725 ページ—

目 次

<大学の動き>

- 平成6年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の志願状況…………… 723
- 平成6年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況…………… 724
- 平成6年度医療技術短期大学部入学志願者状況… 724

<部局の動き>

- 東南アジア研究センター・アフリカ地域研究センター共同研究棟の完成披露と祝賀会…………… 725

<紹介>

- ウイルス研究所遺伝子動態調節研究部門…………… 725

<随想>

- ハイテク考古学への期待
名誉教授 樋口 隆康… 726

日誌

- …………… 726

<コラム>

- 韓国との研究交流
中村 哲… 727
- 計報…………… 727

＜大学の動き＞

平成6年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の志願状況

志願票の受付は、1月24日（月）から2月1日（火）までの間に、各学部で行われた。
学部別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 部	募集人員	志願者数	倍 率	（参考）平成5年度			
				募集人員	志願者数	倍 率	
総合人間学部	前期「文系」	55 ^人	309 ^人	5.6	55 ^人	289 ^人	5.3
	〃 「理系」	55	301	5.5	55	259	4.7
	後 期	20	318	15.9	20	302	15.1
文 学 部	前 期	190	650	3.4	205	664	3.2
	後 期	30	434	14.5	35	502	14.3
教 育 学 部	前 期	40	163	4.1	50	207	4.1
	後 期	20	144	7.2	20	166	8.3
法 学 部	前 期	340	1,072	3.2	350	1,030	2.9
	後 期	60	663	11.1	60	740	12.3
経 済 学 部	前期「一般」	160	534	3.3	170	581	3.4
	〃 「論文」	50	342	6.8	60	410	6.8
	後 期	30	408	13.6	40	521	13.0
理 学 部	前 期	294	856	2.9	294	918	3.1
	後 期	32	1,235	38.6	32	1,108	34.6
医 学 部	前 期	90	385	4.3	90	415	4.6
	後 期	10	303	30.3	10	333	33.3
薬 学 部	前 期	70	201	2.9	60	164	2.7
	後 期	10	190	19.0	20	277	13.9
工 学 部	前 期	947	2,519	2.7	947	2,654	2.8
	後 期	113	1,183	10.5	113	1,344	11.9
農 学 部	前 期	260	836	3.2	260	712	2.7
	後 期	65	813	12.5	65	929	14.3
合 計		2,941	13,859	4.7	3,011	14,525	4.8
	前 期	2,551	8,168	3.2	2,596	8,303	3.2
	後 期	390	5,691	14.6	415	6,222	15.0

（注）法学部（後期日程）と経済学部（後期日程）との募集人員には、「外国学校出身者のための選考」の募集人員20名以内と10名以内とを含む。また、両学部の志願者数には、同選考試験志願者51名と46名とを含む。

平成6年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成6年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月9日（水）、志願者に通知された。学部別の受験予定者数は次表のとおりである。

また、第2次学力検査は同表に記載の試験場で行われる。最終合格者の発表は、3月9日（水）（前期日程試験）と3月23日（水）（後期日程試験）の正午に各学部ごとに行われる予定である。

学 部	日 程	募 集 人 員	受 験 予 定 者 数	第2次学力検査試験場
総合人間学部	前期「文系」	55 人	306 人	総合人間学部
	〃 「理系」	55	296	〃
	後 期	20	297	〃
文 学 部	前 期	190	650	総合人間学部
	後 期	30	283	法・経済学部
教 育 学 部	前 期	40	153	文 学 部
	後 期	20	137	〃
法 学 部	前 期	340	1,071	関西文理学院
	後 期	60	546	法・経済学部
経 済 学 部	前期「一般」	160	534	法・経済学部
	〃 「論文」	50	270	〃
	後 期	30	390	〃
理 学 部	前 期	294	821	総合人間学部
	後 期	32	1,186	〃
医 学 部	前 期	90	365	医 学 部
	後 期	10	277	〃
薬 学 部	前 期	70	201	薬 学 部
	後 期	10	190	〃
工 学 部	前 期	947	2,510	文・法・経済・工学部
	後 期	113	1,179	工 学 部
農 学 部	前 期	260	836	農 学 部
	後 期	65	651	〃
合 計		2,941	13,149	
	前 期	2,551	8,013	
	後 期	390	5,136	

(注) 法学部（後期日程）、経済学部（後期日程）の受験予定者数には、「外国学校出身者のための選考試験」の第1次選考合格者33名と28名を含む。

平成6年度医療技術短期大学部 入学志願者状況

平成6年度医療技術短期大学部入学者選抜試験は、3月4日（金）と5日（土）の両日に実施されるが、入学願書の受付が2月1日（火）から8日（火）まで行われた。

学科別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	倍 率
看護学科	80 人	265 人	3.3
衛生技術学科	40	463	11.58
理学療法学科	20	244	12.2
作業療法学科	20	145	7.25
計	160	1,117	6.98

(医療技術短期大学部)

〈部局の動き〉

**東南アジア研究センター・
アフリカ地域研究センター
共同研究棟の完成披露と祝賀会**

このたび、東南アジア研究センター・アフリカ地域研究センター共同研究棟（鉄筋5階建 2,120 m²）が完成し、1月28日（金）午後4時から、建物

の披露に続き、同研究棟内で祝賀会を開催した。

祝賀会は、両研究センターを代表して、田中アフリカ地域研究センター長の挨拶のあと、井村京都大学総長の祝辞があり、田村事務局長の発声で乾杯、事務局からの招待者、両研究センター教職員等関係者約60名が出席、なごやかに歓談した。

（東南アジア研究センター・
アフリカ地域研究センター）

〈紹介〉

**ウイルス研究所
遺伝子動態調節研究部門**

当研究部門には、情報高分子化学研究分野、分子遺伝学研究分野及び遺伝子情報解析研究分野の3分野がある。

情報高分子化学研究分野の一つのグループは、細胞内シグナル伝達と細胞増殖・分化及び発生のメカニズムの解明をめざし、現在哺乳類培養細胞とアフリカツメガエル卵細胞を主要な生物材料として研究を進めている。特に、細胞増殖や癌化及び細胞分化や発生における MAP キナーゼカスケードの機能を明らかにすること、さらにその発展として、脊椎動物の高次生体機能の分子的理解に至ることをめざしている。また、細胞周期、細胞分裂及びシグナル伝達のメカニズムについて、細胞骨格の機能を探ることを手がかりにアプローチすることも重要な研究目標としている。

情報高分子化学研究分野のもう一つのグループは、「遺伝情報の転写、即ち RNA 合成の過程がその開始から終結に至る様々な段階でどのように制御されているか」という基本的問題の解明に取り組んでいる。目下、転写開始についてはマウスの PEBP 2 因子、終結については大腸菌の rho 因子をそれぞれ主な対象に選んで研究を行っている。これまでに PEBP 2 はショウジョウバエの初期発生制御遺伝子 runt 及びヒトの白血病に関連する癌遺伝子 AML 1 の産物と相同であり、進化的に広く保存された重要な転写因子グループに属することが分かった。また rho 因子は ATP

の加水分解エネルギーを利用して RNA 鎖を転写複合体から遊離させるという興味深い働きを持つことが示された。現在、これら因子の分子構造と作用機構の連関について詳細な解析を進めつつある。

分子遺伝学研究分野では、遺伝子そのものが細胞の中で遺伝子動態調節として重要な役割を果たす過程のいくつかについて解析を進めている。その一つは、遺伝子物質としてのゲノム DNA が複製によって自己増殖するサイクルの遺伝子制御メカニズムである。特に細菌性ウイルス（ファージ）、プラスミド、大腸菌など、分子レベルの精密な解析に適した生物を対象に、DNA サイクルの開始メカニズムを追究している。また、紫外線・変異原化合物等による DNA 損傷への応答（特に SOS 応答）や、熱ショック等による細胞への物理的ストレスに対処する応答などの遺伝子制御と動態調節のメカニズムの解明を目指している。

遺伝子情報解析研究分野では、1生物種のゲノム全体像から生物の基本現象—発生、形態形成、分化、進化—をプログラムしている機構を理解し、その情報を解読することを目的として研究を進めている。現在、ネットワークに繋がった高速のワークステーションを用いて大腸菌 DNA データを収集、解析し、約 4.7×10^6 bp のサイズを持つ大腸菌ゲノムの50%をデータベース化し、そこから抽出される蛋白質コード領域の解析を行っている。今後の研究課題としては、高次の発現調節機構や機能的な構造の抽出、また他生物との比較を検討している。

（ウイルス研究所）

〈随想〉

ハイテク考古学への期待

名誉教授 樋口 隆康

私は現在三つの機関に関係して仕事をしています。住友コレクションとして著名な中国銅器の泉屋博古館と、奈良県の遺跡発掘を行っている橿原考古学研究所と、昨年発足したばかりのシルクロード学術センターである。学会の常識から云うと、専門分野では全く別の範疇に属するが、私は一度も矛盾を感じたことはなかった。この三つの分野には共通する要素が多々あるからである。



例えば、泉屋博古館には中国の古鏡が沢山あるが、その中の三角縁神獸鏡や画文帯神獸鏡は、卑弥呼の銅鏡百面をはじめとする日本の古墳研究には欠かせないものである。

1978年にアフガニスタンのティリア・テペという遺跡からソ連の調査隊が大量の黄金製品を発掘した。それは当時世界の視聴を集めたが、アフガン戦争が勃発したため、一般には実見する機会がなかった。私は1982年にカーブルを訪れた時、その出土品の中に中国の前漢鏡があることを知り、その銘文を読解して、アフガン側に提供した。そのお陰で、アフガン政府が私にティリア・テペの財宝の総てを見せてくれた。その中には後に、橿原考古学研究所が発掘した藤ノ木古墳の金冠の源流をなすものも含まれていたのである。

それにもまして、この三つの分野が共通しているのは、ハイテク技術の研究方法与云ってもいいかもしれない。

考古学における研究資料は古物であるが、従来考古学では、研究者の鑑識眼が大きな役割もっていた。最近では、この古物を自然科学の最新技術を使って、解明することがはやっている。貴重な資料に対する非破壊分析として、蛍光X線分析、放射化分析、ピクシー分析などが

あり、あるいは、鉛同位体測定による産地の同定や、放射性炭素、フイツジョントラックなどによる年代測定、また遺跡に対しては、ジオレーダーによる地下遺構の探査や衛星写真による遺跡の発見などがある。

私はこれらの新技術をいろいろと試みている。シルクロード学術センターが実施しているシリアのバルミラの地下墳墓の発掘には、ジオレーダーを使って、未盗掘の墳墓を発見して、発掘した。泉屋博古館の中国古銅器を島津製作所けいはんな研究所でピクシー分析によって、小さなスペイサーの成分を調べて、鉄であることが判った。また、橿原考古学研究所の保存科学室では、古美術商が持込んできた戦国時代のいわゆる金・銀・銅・石を象嵌した鏡を蛍光X線で調査したところ、この鏡は鏡面と背面の2枚の円板を鉛（ハンダ）で接着しており、象嵌には銅や鉛が使われていて、金・銀の象嵌ではないことが判明した。従来の説を訂正したのである。

このように古代の文物の研究には、自然科学の新技術が大いに役立つことが判っているが、一方、放射性物質の研究や金属素材の腐食の研究などに、古代の文物が有益資料として活用されていることも事実である。そのような、人文科学と自然科学の学際的研究は、総合大学こそ最もふさわしい場と云えるであろう。ところが、実際にはあまり行われていない。同じキャンパスの中に金属分析研究室があるのに、わざわざ大学以外の研究所に分析を依頼する。大学の研究者は自分の専門分野の研究が精一杯で、サーヴィスにやる分析調査などとてもないと云われるのかもしれない。

しかし、人文科学も、自然科学も、要するに人類の生活を限りなく発展させようとする共通の目的に向かって進んでいるのであろう。とすれば、賢い先生方の多い総合大学で、研究室の枠をはづした共同研究によって、ハイテク考古学の新技法を開発して戴きたいと、切に願う次第である。

(ひぐち たかやす 元文学部教授・埋蔵文化財研究センター長 昭和58年退官 専門は考古学)

日 誌

(1994年1月1日～1月31日)

- | | | | |
|------|-------------------|-----|--------------------|
| 1月4日 | 新年名刺交換会 | 21日 | 同和問題委員会 |
| 11日 | 建築委員会 | 24日 | 学位授与式 |
| 15日 | 大学入試センター試験(16日まで) | ク | 大韓民国 閔 寛植 元文部長官他1名 |
| 19日 | 国際交流委員会 | | 来学、総長及び関係教官と懇談 |
| ク | 国際交流会館委員会 | 25日 | 評議会 |

洛書

昨秋、私の親友である韓国・ソウル大の安秉直教授から彼が会長をしている経済史学会が創立30周年を迎え、12月に「韓国経済発展に対する歴史的認識」というテーマでシンポジウムを行いたいのので、そこで私に報告してほしいという依頼があった。丁度、12月に東アジア地域研究会の創立大会で「東アジア資本主義研究の課題」という報告をすることになったので、大体同じ内容をやや韓国に重点をおき「東アジア資本主義と韓国経済」というテーマで引き受けた。

シンポジウムの報告者は日本から私の他に東大の宮嶋教授、韓国から2人であり、日本の植民地時代の報告が日・韓各1人、もう1人の韓国人研究者は戦後の韓国経済の発展を報告した。興味深かったことは、植民地期の報告が日・韓ともに植民地期に経済構造が急速に変化し、植民地型の資本主義化が進むという内容だったことである。

というのは、かつて私は1987年に韓国で日本の植民地時代に韓国経済の資本主義化が、植民

韓国との研究交流

中 村 哲

地的なタイプではあるが、急激に進んだという報告をした時、韓国人研究者から“それでは貴方は、今日韓国が NICs 化したのは日本の植民地になったおかげだと言うのか”と詰問された経験があったからである。ただし、研究会の後で飲みに行きその研究者ともすっかり仲良くなったが。それが今回は韓国の経済史学会において韓国人研究者が、かつての私よりもさらに植民地期の資本主義化を強調する報告をしたわけである。もちろん、7年前の私の報告よりもはるかに進んだ実証をふまえてである。今回もナショナリズム的な反論があったが、概して冷静な討論であった。

経済学部は昨年、ソウル大学校経営大学、社会科学大学（経済学科がある）と学部レベルの国際交流協定を結んだ。韓国でのもう一つの協定締結校である慶北大学校とは3年前「日韓資本主義の比較」というシンポジウムを行った。数年前から「外国経済書講読」に韓国・朝鮮語を加え、東アジア経済史の担当者も迎えた。韓国からの留学生（大学院）も増えている。日・韓の経済学の交流は本格的に進む時期を迎えたと思う。

（なかむら さとる 経済学部教授）

計 報

久 米 直 之 名 誉 教 授

本学名誉教授 久米直之 先生は、1月24日逝去された。享年85。

先生は、昭和8年3月京都帝国大学理学部植物学科を卒業、同大学院を経て昭和12年4月京都帝国大学理学部副手、その後、東北帝国大学理学部講師、助教授を経て第三高等学校教授、昭和25年3月京都大学分校助教授に就任、同36年12月教授に昇任、引き続き同38年4月教養部教授に配置換となり、同47年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、昭和45年4月から同46年3月まで本学教養部長として大学の管理運営に貢献され、また、大学外では、大学基準協会一般教育部専門委員を務められた。

本学退官後は、龍谷大学教授として、学生の指導にその熱情を注がれた。

先生のご専門は植物生理学であり、特に植物における低温生理の分野では耐凍性、耐冷性の機構解明を行って、寒冷地における霜害対策、収穫物貯蔵法の改良に大いに貢献された。また、ドイツ留学時代に薫陶を受けた植物生理学者、ハンス・ヴィンクラー教授の助言により始めたヤブコウジ属の発生生理学的研究では、発生過程に影響を与える諸要因の詳細な分析を行って、当時の誤れる知見を正し、正確な胚子発生の過程を学界に報告された。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和55年には勲三等旭日中綬章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（総合人間学部）